

いろは文字 鉤くさり (その十八―越中山河 家持歌に寄す)

江尻 成 泰 成

いろはにほへと ちりぬるを
わかよたれそ つねならむ
うゐのおくやま けふこえて
あさきゆめみし ゑひもせず
色は匂へど 散りぬるを
我が世誰ぞ 常ならむ
有為の奥山 今日越えて
浅き夢見じ 酔ひもせず
(ん)

一 立山たちやまの賦一首 短歌を并せたり 此の立山は新川郡にひかはのこほりにあり

天離あまなる 鄙ひなに名懸なかす 越こしの中なか 国内くぬちごとごと 山やまはしも 繁しじにあれども 川
はしも 多おほに行ゆけども すめ神かみの 領うしほき坐います 新川にひかはの その立山たちやまに 常夏とこなつに
雪降ゆきり敷ふきて 帯おビばせる 片貝川かたかひがはの 清きき瀬せに 朝夕あさよひごとに 立つ霧きりの 思おもひ
過とぎめや あり通がよひ いや毎年としのほに 外よそのみも 振なり放はなけ見みつつ 万代よろづよの 語かたら
ひ草ひくさと いまだ見みぬ 人ひとにも告つげむ 音ねのみも 名なのみも聞ききて 羨とほしぶるが
ね (卷十七―四〇〇〇)

立山たちやまに 降ふり置おける雪ゆきを 常夏とこなつに 見みれども飽あかず 神かむからならし (卷十七―
四〇〇一)

片貝かたかひの 川がはの瀬せ清きく 行いく水みづの 絶たゆることなく あり通がよひ見みむ (卷十七―四
〇〇二)

いざ任所まけじころ

浪漫の越ろまん こしは

遥かみ空に

新川山秀にひかはやまほ

秀並は幾重ほなみ いくへ

碧天の下へきてん もと

常雪の幸とこゆき さち

千代の神在りあ

凜然立ちぬりんぜん

幣もて見遣るぬさ みや

瑠璃立山をるりたちやま

拝み眺むわをが

湧く水清かさや

片貝川よかたかひがは

万代にまたよろづよ

滝つ瀬は割れたけ

冷氣満つるぞみ

そこ霧も立つ

連れ立ち尋ねたづ

懇に見なねごと

名懸かす真秀か まほら

乱歌に告げむらんか

無比の越州あつしう

歌ひ続け居あ

偉観ぞ国のあくわん

望みなるおお

二 新川郡の延槻川を渡る時に作る歌一首にひかはのこほり はひつきがは

立山の雪し消らしも 延槻の川の渡瀬 鑑浸かすも (巻十七ー四〇二四)

音ぞ轟とどろく

奇くしき景や

山は立山たちやま

まさに雪溶とけ

今日駒惑まじふ

深ふかき瀬せはここ

此延槻越こほひつきえ

縁えんある行く手

照る水はああ

鏡かがみの深ふかさ

三 礪波郡の雄神川の辺にして作る歌一首

雄神川 紅くれないにほふ 少女をとめらし 葦あし附つ水松みづのまつの類るい採とると 瀬せに立たたすらし (卷十七)

一四〇二二

さても煌きらめき

清きよら波見なみゆ

床ゆかしや少女をとめ

女子めこら勤いそしみ

皆葦あし附つき

繁しじに採とる声

笑ゑまひ語かたらひ

光あきる雄神をかみも

裳裾もすそ濡ぬらす瀬

瀬せも紅くれないす

(平成二十九年四月二十三日)

本歌一〇天平十九年（七四七年）四月二十七日、その十六「二上山の賦」のほぼ一か月後の作。

名懸かす〇名高い。

山はしも、川はしも〇シモは強意。

繁に〇隙間なくぎつしりと、いっばいに。

多に〇数多く。

すめ神の領き坐す〇すめ神は山や森などを支配する神。領クは土地を領有、支配する。

新川、新川郡〇富山県東部、今は中新川、下新川の二郡ある。富山県中部の常願寺川の古名が新川だった。

立山〇富山県南東部、北アルプスの立山。万葉仮名では「多知夜麻」と書いている。日

本三霊山の一つ。

帯ばせる〇川が山裾を巡って帯のように流れている。

片貝川〇立山連峰の北部に発し、魚津市の北で富山湾に注ぐ。標高2000メートルの

水源から27キロメートルで河口に至る急流。

立つ霧の 思ひ過ぎめや〇立山を思い崇める気持ちが霧のように消えることがある

か。思ヒ過グは思いが消える、思わなくなる。

あり通ひ〇いつも通って。

外のみも〇外からだけでも、遠くからだけでも。

いまだ見ぬ 人にも告げむ〇まだこの風景を見ていない人（都にいる人たち）にも私は

（歌で）告げよう。

音のみも〇音は評判、噂。

羨しぶるがね〇羨ましがるように。

神からならし〇神の品格のゆえであろう。

行く水の〇流れゆく水のように（絶えることなく）。

任所まけどころ 任地まけ。任は地方官に任命して派遣すること。任まクは官職に任ずる。「大君の任まけの

まにまに」(大君の任命のままに) は家持がよく使うフレーズ。

新川山秀にひかはやまほ 秀並は幾重ほんみ 秀は高くひいでているもの。立山連峰の峻嶮やまなみ 莊嚴な山脈を言う。

滝たぎつ瀬は割れ 水の激しい流れが岩に当たって分かれる。「瀬をはやみ岩にせかるる滝

川のわれても末にあはむとぞ思ふ」と百人一首に。

懇ねもころに見な 心ゆくまで見たい。「な」は意志、希望を表す上代語。

名懸なかす真秀まほら 乱歌らんかに告げむ 名高いすぐれた佳いところを、乱れた拙い歌ではある

が(都の人たちに) 伝えよう。

本歌二 前の歌の翌年。国守として越中諸所を巡り風光を歌にした。

延槻川はひつきがは 今、早月川という。水源は剣岳。片貝川と並ぶ急流河川。

雪ゆきし消くらしも 立山の雪が溶けているらしい。

笠あぶみ浸つかすも アブミまで水につからせた。笠は鞍の両側に下げ足を受ける馬具。足踏

の意。

奇くしき景けいや どのかな大和にはない、高山大河の景は都人には驚きであろう。

今日けふ駒こま惑まどふ 今日はいつもと違ちがって私の馬がたじろいでいる。

此こ延槻はひつきがは越え この延槻川を越えて。

本歌三 延槻川はひつきがはの歌の少し前の作らしい。

礪波郡となみ 富山県の南西部を占めた。今はない。

雄神川をかみがは 今の名前は庄川。岐阜県烏帽子岳に水源。白川村を通り砺波平野を北上し、高

岡市と射水市の境で富山湾に注ぐ。古代には小矢部市あたりで小矢部川(当時の名は射水川)と合流していたという。

皆葦あしつき附あしつきは淡水に生える藻の一種で石や葦に付着する。食用。あしつき海苔。家

持は海産の水松みるみる(海松)に似ていると注を入れている。「し」は強調。

瀬も紅くれなゐすく娘たちの赤裳に水も映えている。すは音や風、香りなどに付いて、その事象しやうが起おこることを表す。ここでは「紅色になる、染まる」。(例、御執みとらしの梓あづきの弓の金弮かなはずの音すなり・・・卷一―三)

(平成二十九年四月二十六日)

後記

「その十六」で二上山を詠んだが、立山の歌も何とか残したいと思っていた。河川も加えてこういう形にした。

(付記 葦あし附つについては、高岡市には葦附という地名がある。高岡市南郊で庄川の右岸。あしつき公園があり、この家持歌の歌碑も建っている。)

(平成二十九年四月二十六日)